

行動する経済同友会

学校と企業・経営者の 交流活動推進委員会

活動レポート

将来への夢、未来へのビジョンを描けない子供たちが増えている。加えて昨今は、フリーターやニートの問題が社会的にクローズアップされている。経済同友会は1999年以来、学校と企業・経営者の『交流』を図る取り組みを推進してきたが、その重要性は増すばかりだ。企業経営者が自らの体験とともに社会の実状を伝えることで、子供たちの健全な就業観育成に貢献できるのではないかと。今回の特集では「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」の活動レポートを通じて、『交流』の意味や意義をあらためて考えてみたい。



遠藤勝裕委員長が語る

▶ P.3

～パネルディスカッションでの委員会活動報告より～

9名の経営者が中学校へ

▶ P.4

～北区立飛鳥中学校での出張授業より～

北城格太郎代表幹事が講師に

▶ P.7

～世田谷区立烏山中学校での講演より～

**学校と企業・経営者の
交流活動推進委員会の足跡**

▶ P.9

遠藤勝裕委員長による委員会活動報告

交流活動を通じ、
学校教育改革に寄与



「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」の遠藤勝裕委員長（日本証券代行取締役社長）は、去る9月27日、（財）社会経済生産性本部が開催した「若者が希望を持てる社会をつくる～10年後の日本を担う人材を育てるために～」と題するパネルディスカッションに参加し、委員会の活動を紹介した。

交流活動の目的を共有し、
対象別に具体的方策を検討

経済同友会は、これまでに数々の教育提言を発信するとともに、近年では学校と企業の交流活動を積極的に推進してきた。その背景には、学校教育を受けた若者を受け入れる企業の現場からの強い危機感がある。

こうしたことを背景に「提言を出すだけではなく、我々にできることは何かないだろうか」「我々自身が教育現場へ出ていこう」という問題意識のもと、1999年度から当時の教育委員会（北城恪太郎委員長）が、いわゆる「出張授業」を開始。2001年度からは経済同友会全体の活動として、今日まで積極的に交流活動を展開している。

今年度の委員会の活動目標は、「交流活動の実践を通じて、様々な課題を抱えるわが国の学校教育の改革推進に役立とう」というこ

とである。具体的には、①活動全体のベクトル合わせを行い、②質の向上、③量の拡大を図る、という3つの課題を挙げて、その実現に向け取り組んでいる。

まず『活動全体のベクトル合わせ』を図るため、本来の活動目的の再確認を行った。そのうえで、①生徒に対して「職業観の育成への貢献」「将来について考えるためのきっかけ作り」、②教師に対して「社会の変化に応じた変革の促進」「学校現場へのエール発信」「学校経営改革の支援」、③保護者に対して「企業や社会の変化の説明」と、対象別に具体的な働きかけの方策を整理した。

交流活動の最重要課題は
質量両面での拡大

『質の向上』と『量の拡大』は、今年度の交流活動の2本柱である。

『質の向上』、すなわち、より充実した出張授業等を実践するため

に、①発展的な出張授業の実施、②講師の得意なテーマ一覧のホームページ掲載、③過去の講演事例のまとめと情報共有、④若手社員とのコラボレーション、⑤学校と講師との事前打ち合わせの徹底、などを行っている。なかでも、同じ生徒に同じ講師が複数回の出張授業を行うことは、生徒の感想や疑問に直接答えるだけでなく、生徒の理解度に応じた発展的授業ができ、より高い効果が期待できる。

一方、『量の拡大』では、出張授業実施校の新規開拓に努めている。今年度は、実施件数100件、講師延べ人数200名（2004年度は78件、177名）を数値目標に掲げ、都内の公立中学校に働きかけを行っている。既に実施した学校は継続実施する傾向にあるが、新規校の反応は薄い。交流の輪を広げるためにも、教育現場からの前向きな反応をもっと期待したい。

最後に、我々の交流活動は子供を対象にした出張授業だけを行っているわけではない。校長・教頭先生からは、現場の教師に厳しい社会の現実をもっと伝えてほしいという要望も多い。さらに、保護者向けの講演・意見交換会なども要望に応じて実践している。



社会経済生産性本部主催のパネルディスカッションに出席した遠藤勝裕氏（中央）は基調報告を行った後、墨田区立本所中学校校長の森本芳男氏（右）と、学校と企業は互いに何を求めているか、などについて意見を交わした。

北区立飛鳥中学校での出張授業

9名の経営者が講師を務めた「ようこそ先輩」

9月6日、東京都北区立飛鳥中学校で実施された出張授業「ようこそ先輩」に、経済同友会から9名の経営者が講師として参加した。飛鳥中学がこうした形態の授業を始めたのは3年前のことで、その時から連続して、経済同友会は“先生”を派遣している。授業終了後は校長と懇談するなど、経営者にとっても“学習”の機会であったかもしれない。遠藤委員長・山中副委員長両氏の授業内容や生徒からの感想などをレポートする。

飛鳥中学校では、2年生になると「総合的な学習」の一貫として、働くことへの理解と関心を深める「勤労学習」が毎週行われる。義務教育8年目を迎えた生徒た

ちは、少しずつ社会とのかかわりを意識し始める。この時期に、社会や企業の第一線で重責を担っている“人生の先輩”から、社会人としての経験談や生き方などについ

て直接話を聞くことは、自らの将来を考え、現実的な目標を身につけていく上で非常に意義深い。同時に、進路指導を行う教師にとっても、時代とともに変化する職業観を知り、時代に即した新しい考え方・知識・情報に頭を切り替えていく上で、大きな刺激となる。

そうした意味合いから、経済同友会の出張授業は、生徒にとっても教師にとっても、たいへん貴重な機会と言える。3回目となる今年度は、以下の9名の経営者が授業を行い、少人数グループに分かれた生徒に「働くこと」の意味について語りかけた。



●講師の紹介 (役職は開催当時)

遠藤 勝裕氏 (日本証券代行 取締役社長)

山中 信義氏 (日本エマソン 取締役社長)

金代 健次郎氏

(ベネッセ・コーポレーション 取締役)

「今は、何をやるにも“世界を意識する”ことがはずせない社会なのだ」

西田 一郎氏

(国際基督教大学 財務理事・総務副学長)

「進路を迷うのは、選択肢がたくさんあるから。皆さんは恵まれている」

広瀬 駒雄氏

(ジョイント・コーポレーション 取締役)

「職業によって求められる学問水準は違うが、中学の勉強は社会人の基礎だ」

小澤 啓一郎氏

(テレビ朝日 常勤顧問)

「何になりたいのかを絶えず自分に問い続けることが重要だ」

建部 信也氏

(エヌ・イーケムキャット 特別顧問)

「なぜ働くのか？」それを考えなければ、日本全体が困ったことになる」

林 明夫氏

(開倫塾 取締役社長)

「良く生きるためには準備が要る。準備の無いところに成功はない」

山田 正喜子氏

(ベリングポイント 顧問)

「好きなことを徹底してやりなさい。苦勞してでも好きなことを見つけなさい」

● 遠藤 勝裕氏の授業 ●

お金の流通を通して社会貢献

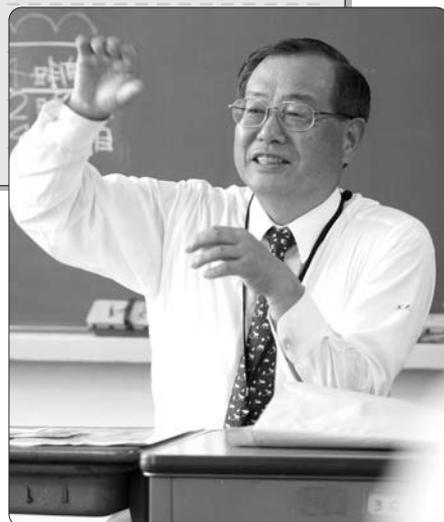
私が卒業して最初に就職した日本銀行は、お札を発行しているところです。お札は正式には「日本銀行券」といい、日本銀行は「銀行の銀行」という役割を担っています。皆さんに渡したボールペンの中に入っているお札の断片は、世の中のいろいろな人の手を流通し、日本中の銀行から日本銀行に戻ってきたものの一部です。戻っ



てきたお札は人の手で1枚1枚数えられ、本物か偽物か、さらに、綺麗か汚いかの選別を受けて、再び流通させるか、捨てるかが決められます。

このようにお金がきちんと流通している社会は健全な社会です。なぜ健全かと言えば、お金には、「強制通用力」と、日本全国どこでも使える「法定通貨」という特性があるからです。そんな大切なお金をいつでもどこでもきちんと届けることが日本銀行の大事な仕事です。

米国のハリケーン災害では被災者の一部が略奪者となっ



てしまいましたが、10年前の阪神淡路大震災で約40万人が避難生活を余儀なくされた時でも、日本銀行はきちんとお金を流通させ、被災者が必要とするものを手にできるようにしました。私自身も被災者でしたが、この時初めて、仕事で社会に役立つということの意味、本当のやりがいを実感することができました。

● 山中 信義氏の授業 ●

競争社会を前向きに捉えよう



皆さんがこれから競争社会を生き抜いていくためには、個性が大切です。自分の個性を客観的に評価することができれば、より個性を発揮することができます。今日は、経営判断に使われている、「Strength（長所）」「Weakness（短所）」「Opportunity（チャンス）」「Threat（リスク）」という4つの指標を使って、自分の個性を分析してみましょう。

「リスクが多くて大変だ」と思う

人もいるかもしれません。しかし、それをはねのけるポジティブな思考を持てば、魅力的な人材になれるのです。

「Half Full and Half Empty」という考え方があります。コップに入っている水を見て、「まだ半分ある」と思うのか、「もう半分しかない」と思うのか。皆さんにはぜひ、「競争」を前向きに捉え、高い夢を持ち、情熱と努力を継続してほしいと思います。

●広瀬駒雄氏担当の生徒

中学で習うことは中学時代に (2年C組 K.S.)
「社会人の基礎は、中学時代の勉強や体力にある」という言葉が強く印象に残りました。勉強がどんどん難しくなって、分からないことも増えています。それでも、先輩のお話を聞き、中学校が終わればもう関係ないでは済まないことに気づきました。

●建部信也氏担当の生徒

波乱万丈な先輩の人生に感激 (2年B組 Y.T.)
先輩の今に至るまでの人生に感激しました。仕事が見つからなかったら、僕ならすぐ諦めてしまうと思います。ところが海外へ視野を広げ、自分の夢をつかんでしまう。僕も自分の夢をつかめる人生を送りたいと思いました。

●小澤啓一郎氏担当の生徒

チームプレーの大切さを勉強 (2年A組 A.A.)
テレビドラマの制作現場では50人前後のスタッフが働いていて、チームプレーや人間関係がうまくいかなければいい番組は作れないし、人柄が悪ければ誰もついてこない。それはどんな仕事でも同じだということが先輩の体験談で納得できました。

●金代健次郎氏担当の生徒

求められる人材の変化に納得 (2年A組 M.M.)
スポーツやアニメなど、社会の変化とは全く関係ないと思っていたものも、実は社会を考えるうえで重要なものだということが分かりました。また、社会はどんどん変化していき、それに伴って求められる人材も変化していくことを初めて知りました。

●飛鳥中学からの感想文●



●林明夫氏担当の生徒

先輩の手帖を見てびっくり! (2年B組 Y.O.)
英語とコンピュータ、そして、新聞を読むことは働くうえで必要という教えは忘れません。先輩の手帖に書き込まれたたくさんの英語と漢字に驚きました。

●西田一郎氏担当の生徒

「生きる力」の方法に感激 (2年B組 S.Y.)
将来に不安を持っていたので、先輩の「生きる力」をつける方法に感激しました。健康、読み・書き・そろばん、夢と希望、少々のお金、そして、対話力、社会への関心。この方法を少しずつ試してみます。

●山田正喜子氏担当の生徒

働くことの意味を知りました (2年C組 Y.K.)
働くとは、お金を稼ぐことではなく、人生にある一つの楽しみなのですね。割のいい仕事を捨ててまで大好きな焼酎造りを始めた先輩の教え子を尊敬します。

●山中信義氏担当の生徒

好きなことから始めます (2年C組 M.S.)
印象に残ったのは、「もう」を「まだ」にする「Half Full」というポジティブな発想です。私は英語が苦手ですが、好きなことをがんばることで自信をつけ、その結果、短所もなくなればいいなと感じました。

●遠藤勝裕氏担当の生徒

私も人のために働きます (2年A組 M.W.)
遠藤先輩は50歳で阪神淡路大震災を体験されたようですが、その時にいつもチャラチャラしていた高校生が一生懸命手伝いをした話を聞き、私も人のためになる仕事をやりたいと思うようになりました。

校長・先生からの感想

中学2年生の日常生活の中では、決して関心を持ったり深く考えたりすることのない貴重なお話やご経験をじかに聞くことができ、自分の生活のこと、将来のこと、社会の仕組み等について考えるヒントをいただけたようです。また、日頃は親や先生といっ

た限られた大人としか接する機会のない生徒たちにとって、講師の皆様と直接お話することは大変貴重な体験でした。学んだことは今後の「勤労学習」「進路学習」に反映させていきたいと思えます。
(小寺正樹校長・菊池知裕主任)

世田谷区立烏山中学校での出張授業

北城代表幹事講演「なぜ人は働くのか」

学校と企業・経営者の交流活動がスタートした6年前から教育現場へ積極的に出向き、自らの言葉で「働くこと」の意味や楽しさを子供たちに伝えてきた北城恪太郎代表幹事（日本アイ・ビー・エム 取締役会長）。9月28日には、世田谷区立烏山中学校で特別授業を行った。2年生160名に加え、有志の保護者も出席した北城氏の講義を紹介する。

働く楽しさ、生きがいは

世の中には実に様々な人が働いており、そのおかげで、私たちは食事もできるし、毎日の生活ができるわけです。つまり、大人になって働くということは、収入を得ると同時に、いろいろな人や社会の役に立つということを意味しています。

私は現在、日本アイ・ビー・エムという会社の取締役会長を務めています。会社ではコンピュータを作ったり、システムを開発することで、お客様の役に立つような仕事をしています。例えば、コンビニにATMがあれば、銀行が閉まっている時間でもお金が下ろせて便利でしょう。私はその考えを実現させるために、多くのお店にIBMのATMを入れようと努力した結果、大勢の人が喜んでくれました。私はそうしたお客様の声を聞くたびに、働く楽しさ、生きがいを感じます。



将来の競争相手は、全世界

私は数年前までアジア19カ国の統括責任者をしていて、毎週のように海外へ出掛けていました。いろいろな国の人々と仕事をすることは大変興味深いものです。例えば、イン

ドや中国の社員はより豊かな生活を求めて必死に働き、学生も本当に寝る間を惜しんで勉強します。それに対して、食べることに困ったことのない日本の学生は、「必死に勉強しないと仕事に就けない！」という意識は希薄です。それでも、近い将来、皆さんはアジアを含めた世界と競争しなければなりません。その中で豊かな生活を維持することが、難しくなってくるということを知っておくべきだと思います。

人生を左右した3つのきっかけ

中学時代から私は理科や数学が大好きで、科学者になりたいという夢を持っていました。ところが、卒業前に担任の先生から、「他の教科の成績と比べて英語がよくない」と言われました。その一言が



悔しくて、高校3年間で英語を必死に勉強したところ、半年ぐらいで自信がつき、次第に英語が面白くなっていきました。

大学へ進む際には、工学系ということは決めていましたが、具体的に何を勉強するのかで悩みました。そんな時、「これからはコンピュータの時代」という新聞記事を目にし、「これだ！」と直感してコンピュータ関連の学部・学科に決めました。好きな分野の勉強をするのは本当に楽しいもので、4年生の時にはソフトウェアのプログラム作りに没頭していました。入社前日の3月31日まで研究室に通いましたが、帰り道に見た星空の美しさは今でも忘れられません。

IBMへの入社後、私はアメリカの大学院に2年間留学する機会を

得ましたが、英語による選考試験を突破できたのも、高校時代の経験が役に立ったからだと思っています。大学院には、世界中からいろいろな人がやってきます。一緒に勉強し、会話を重ねていくうちに、それぞれに独自の文化や世界観があることが分かってきました。そして、この時の経験も、アジア地域の責任者として現地の人々と仕事をする際の貴重な財産となっています。

こう考えていくと、人生の途中には自分の進路を左右する重要なきっかけがいくつかあります。それは人によって違いますが、きっかけがそばに来た時、逃さず挑戦することが大切だと思います。

好きな分野で明るい挑戦を

皆さんを含め、大半の人は、人生の中心の20代から60代までの40年間、社会で働くわけですから、自分にとって面白いと感じる分野で仕事ができの方が人生はずっと楽しくなるはずです。そのためにも、学生時代のうちに「どんな仕事に興味があるのか?」「夢に近づくためにはどんな勉強が必要か?」といったことを考えてみてください。また、その過程では、仕事の具体的なことについて、両



親や周囲の大人に話を聞いてみることも必要でしょう。

最後に、皆さんには「一芸に秀でよ!」という言葉を送りたいと思います。私は、「明るく、楽しく、前向きに生きる」を人生のモットーにしていますが、皆さんも得意分野を早く見つけて力を蓄え、きっかけを引き寄せ、思い切って挑戦してほしいと思います。

生徒からの質問に答えて(抜粋)

●仕事で挫折したことは?

「常に前向きに挑戦してきましたから、挫折した思い出はありません(笑)。失敗した経験はありますが、経営者が落ち込んでいたら会社はうまくいきません」

●ニートについてどう思うか?

「ニートになりそうな人に対して

と、既になっている人に対してと、2つの意見があります。なりそうな人は自分に合った仕事を探すことが大切ですし、ニートの人はアルバイトでもいいから何か仕事を始めてみるべきだと思います。

仕事で何かをやり遂げて、それが社会の役に立ち、誰か喜んでくれる人がいる。そういう人生の方が豊かで、生きがいも感じられるはずです」

●初任給は何に使ったか?

「いい質問ですが、残念ながら覚えていません。親に何か買ったのかもしれませんが。私の初任給は3万2千円でした。皆さんが初任給を受け取った時には、何でもいいですから、ご両親に感謝の気持ちを込めて贈り物をしてあげてください」

企業経営者の皆様へ

「学校と企業・経営者の交流活動」は経済同友会会員有志のボランティアによって支えられています。講師登録をご希望の方は、事務局*までご連絡ください。なお、活動の詳細については、経済同友会ホームページ「学校と企業・経営者の交流活動」コーナーをご覧ください。

<http://www.doyukai.or.jp/>

【*事務局担当：織田 TEL 03-3284-0220】

「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」の足跡

経済同友会の会員有志がボランティアで学校に出向くという交流活動は、1999年度から始まった。だが、当時は個別的な要請に応じて単発的に行われる形で、その件数も少なかった。

交流活動の実施件数は、2001年度に入り飛躍的に増加した。教育委員会（北城恪太郎委員長）は、提言「学校と企業の一層の交流活動を目指して一企業経営者による教育現場への積極的な参画一」を発表し、交流活動の意義を再確認するとともに、経済同友会全体で継続的に活動していく方針を示した。

かねてより経済同友会は、教育分野への提言を活発に行っており（1989年以降8回の提言を発表）、その提言内容を実践していくべきという認識のもと、2002年度からは組織的な取り組みを開始した。さらに、2003年度には「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」を発足させた。中・高生対象の出張授業ばかりでなく、教員や保護者を対象とする研修会・懇談会等、交流活動の様態は多岐にわたっている。



2003年度委員長
石川 史郎氏



2004年度委員長
加藤 丈夫氏

●歴代委員長

2003年度 石川 史郎氏（竹中工務店 顧問）

2004年度 加藤 丈夫氏（富士電機ホールディングス 相談役）

2005年度 遠藤 勝裕氏（日本証券代行 取締役社長）

※役職は、委員長在任当時

●実施件数

種別	授業			講演会・懇談会			合計	
	対象	中学生	高校生	計	教員	保護者		計
1999年度		1	4	5	12	1	13	18
2000年度		4	6	10	17	2	19	29
2001年度		21	16	37	37	17	54	91
2002年度		15	10	25	28	7	35	60
2003年度		22	13	35	34	13	47	82
2004年度		14	20	34	36	6	42	76
合計		77	69	146	164	46	210	358

●講師人数

種別	授業			講演会・懇談会			合計	
	対象	中学生	高校生	計	教員	保護者		計
1999年度		2	4	6	12	1	13	19
2000年度		14	6	20	17	2	19	39
2001年度		70	20	90	37	17	54	144
2002年度		56	10	66	28	7	35	101
2003年度		67	20	87	35	13	48	135
2004年度		77	40	117	47	6	53	170
合計		286	100	386	176	46	222	615

●2005年度 委員会 副委員長

大塚 良彦（大塚産業クリエイツ 取締役社長）

尾原 蓉子（IFI〔(財)ファッション産業人材育成機構〕
IFI ビジネス・スクール 学長）

小林 いずみ（メリルリンチ日本証券 取締役社長）

西田 一郎（国際基督教大学 理事・総務副学長）

前原 金一（昭和女子大学 副理事長）

茂木 賢三郎（キッコーマン 取締役副会長）

山中 信義（日本エマソン 取締役社長）